

## 樹木画に見る子どもの怒り感情

増岡, 怜那  
九州大学大学院人間環境学府

高橋, 靖恵  
九州大学大学院人間環境学研究院

<https://doi.org/10.15017/8026>

---

出版情報 : 九州大学心理学研究. 7, pp.139-146, 2006-03-31. 九州大学大学院人間環境学研究院  
バージョン :  
権利関係 :

# 樹木画に見る子どもの怒り感情

増岡 怜那 九州大学大学院人間環境学府  
高橋 靖恵 九州大学大学院人間環境学研究院

## Understand the children's anger through tree drawing

Leina Masuoka (*Graduate school of human-environment studies, Kyushu university*)  
Yasue Takahashi (*Faculty of human-environment studies, Kyushu university*)

When small children (three to six years old) express their anger through inappropriate behavior or over reacting, most parents and other adults find this anger hard to deal with. That is because people see anger as a negative emotion. In actuality expressing anger can be a positive step in emotional development. In this study two kinds of tests were conducted on six years olds. The first test, [Tree drawing test] a drawing of a tree from each subject, was used to measure the individual's level of emotional development. In the second test each subject was shown four conflicting scenes and then asked to give an emotional reaction by choosing from four different facial expressions - happy, sad, anger, surprise. From this study it became evident that helping small children to understand their anger and encouraging expression of anger in an acceptable manner, positive emotional development occurs.

**Keywords:** children, anger, Tree drawing

## 問 題

子ども（特に就学前の幼児）の活動を観察していると、実に早い展開で感情の変化を見ることが出来る。そこでは感情に伴い、泣いたり、笑ったり、怒ったりと様々な表情を見ることが出来る。このような感情は生後3ヶ月ころから出現し、不快感から発せられる怒りが中心となり、生理的な要因が大きい。しかし、生後6ヶ月頃になるとその他の感情もはっきり認められるようになり、喜怒哀楽といった基本的な感情は2歳頃までに発達するとされる（横山，1989）。最も早い時期から体験されている怒り感情は、年齢の上昇とともに表出の仕方が変化していくが、表出する状況によっては「わがまま」と言われたり、「かんしゃく」と言われたり、周囲の評価も様々である。そして多くの場合、反抗的であるなど否定的に捉えられている。

怒りのきっかけは周囲の人々との関係である(Wallon, 1938)ことから、対人場面で問題が生じる状況として葛藤場面が考えられる。子どもの葛藤について Wallon(1952)は、子どもが家族と密接に結びついていると感じていると同時に、他方では自らの自律性を渴望している状態であると述べている。特に3～5歳の時期は葛藤の時期であり、他者との葛藤状況により行動が規定されることにも触れている。依存と自律を子どもたちはどのように体験しているのだろうか。様々な葛藤場面において、子どもたちはそれぞれの反応を示し、この時に怒りを表

出しやすいか、悲しみを表出しやすいかで、よく怒る子、よく泣く子がいるように観察されるのではないだろうか。幼児期の情緒の特徴として、Osborne(1982, 1983)は次のようにまとめている。1.持続時間が短い 2.感情が爆発的（特に恐れ・怒り・喜び）3.感情が一過性（いつの間にか仲直り）4.現れる度数が多い（喜怒哀楽をよく表出する）がある。その中で、怒りについてみると、要求が否定された時、押さえつけられた時、それに抵抗する時に生じ、幼児期は大体即時的なフラストレーションから怒ると述べている。

では、子どもたちはどのように感情を表現し、大人はどのように子どもを理解しようとしているのだろうか。

言語による伝達力が未熟な子どもたちは、自分の知り限りの言葉だけでなく、様々な方法を駆使して周囲の環境とコンタクトをとろうと努力している。そのなかでも、無意識に心理を投射してしまう絵画は、知的発達の状態や心理状態を観察できるとして、これまであらゆる分野で注目され続けている。心理臨床場面において、子どもの絵は重要視されていることは言うまでもなく、子どもの絵の有用性は多方面で議論されている。Peterson & Hardin(1997)は、「子どもが体験した精神的外傷を大人に伝えるには子どもが備えている言葉だけではむりがあるため、また、アートによって強い感情の葛藤から感情を芸術表現する方向へと子どもの精神的エネルギーが向きなおされ、子どもの緊張感を緩和できる」と絵画の有用性を述べている。しかし、投映的な意味として絵

を扱うには信頼性と妥当性に欠け、これまでテストとしての基準を満たすことができないとされてきた。その結果、子どもの絵の標準化が進められ、人物画の諸研究より、認知能力・知的側面を測定するための信頼性と妥当性を科学的に備えることができたものの、感情面を投射しているのかという点では裏づけが取れていない。このように、感情と描画の関連を説明できていないにもかかわらず、心理臨床家は子どもの絵がパーソナリティの感情面を無意識に投射しており、その特性や感受性の表れとして、また、ラポールをとる手段として、子どもの絵を評価し続けている(Winnicott, 1971)。Di Leo(1983)は「幼児はあまりにも未熟であるため、絵に如実に表れて気持ち意外何も表現することができない。…微妙な心理状態が意識的に表されるのは、青年期になってから」と述べている。このことから、青年期前の子どもの絵には、感情や性格特性が投射されているとみなすことができる。

以上より、葛藤場面における感情表出の違いが子どもの性格特性によるものであれば、怒りを示しやすい子どもの絵画に特徴が見られると考えた。

従って本研究では、葛藤場面に対して怒り感情を示しやすい子どもの樹木画には、樹木画の解釈でも述べられているような攻撃性や外向的な特徴が見られる(枝がとげとげしくなっているなど)かどうかを検討することを目的とする。

## 方 法

### 1. 対 象

幼稚園に通う就学前の子ども6名(男児5名・女児1名)。全対象児は満6歳であり、それぞれ異なる幼稚園に通っている。以下に対象児A～Fについて概説する。

1) 対象児Aの日常の様子：対象児Aはひとりっ子である。特定の友達と遊ぶことが多く、友達関係は良好である。集団活動では協動的に活動することができるようになってきている。自信の持てる活動では活発に参加する。

2) 対象児Bの日常の様子：対象児Bは二人きょうだいの第二子である。リーダー的存在であるが、一人で遊んでいることが多い。集団での学習時間では活発に発表している。

3) 対象児Cの日常の様子：三人きょうだいの長子。面倒見がよく、リーダーシップをとる。活動には意欲的に参加する。母親の手伝いなど自発的にしているようである。

4) 対象児Dの日常の様子：対象児Dは二人きょうだいの第二子である。一人で熱中して想像的な遊びをしていることが多い。

5) 対象児Eの日常の様子：対象児Eはひとりっ子で

ある。あらゆる活動に参加し、積極的に取り組んでいる。

6) 対象児Fの日常の様子：対象児Fは三人きょうだいの第二子である。何事に対しても楽しく取り組んでいる。

### 2. 本研究の実施手続き

1.の対象児すべてに対して、検査法として樹木画を、実験法として葛藤場面における感情選択の実験を実施した。X年11月に一人ずつ樹木画を描写してもらい、一週間後に葛藤場面における感情選択の実験をしてもらった。その実験において、怒りを選択した子どもの樹木画について検討した。以下、それぞれについて詳細に説明する。

### 3. 樹木画

子どもに対する侵襲性を考慮し、子どもの性格特性を理解する描画法として、木の絵を描いてもらうことにした。木の絵であれば日常的に描く内容でもあり、描きやすいテーマである。木を描かせる描画法に樹木画とバウムテストがあるが、両者の特徴的な違いに「教示」があげられる。筆者はバウムテストの教示のように「実のなる木を描いてください」と言った場合に、子どもたちが混乱すると推測した。このようなことから、実を描くことを教示しない樹木画を実施することにした。

#### 1) 実施手続き

教示は「木を一本描いてください」とした。用紙はA4、鉛筆はHBを使用。時間制限は与えず、自分のペースで絵を描いてもらった。対象児の平均所用時間は約5分ほどであった。

#### 2) 分析方法

高橋ら(1986)の樹木画の解釈に従い、対象児の全体的な状態と怒りの指標を見るために、分析の視点を限った。1.樹木のサイズと描いた位置(対象児の内面的な状態が示される)2.枝の様子(環境や周囲の人間関係における関係の持ち方が反映されている。先のとがった枝は敵意・攻撃性を意味しているといわれる)3.幹の様子(幹は感情面を表しており、感情機能の働きを象徴している)4.全体的な印象(指標からだけではなく、全体的な印象から対象児の一般的な適応水準と情緒や精神の成熟度などの情報が得られる)5.その他の特徴(気になる特徴が見られた場合に記述した)

### 4. 葛藤場面における感情選択の実験

#### 1) 実施手続き

葛藤場面を示した描画を呈示し、物語りの読み聞かせの様子に状況を示した。その場面において、「主人公がどんな顔をしているのか」を問い、どのような感情が生じたのかを表情カードから選択してもらった。制限時間は与えず、自分のペースで回答してもらった。対象児の平

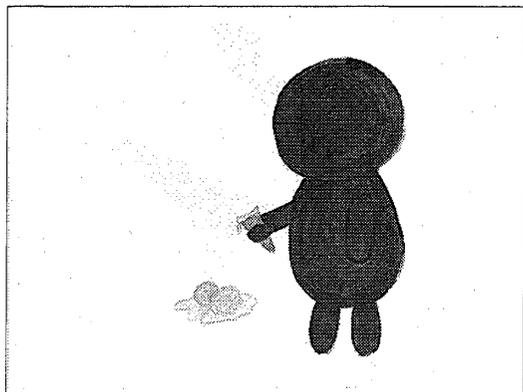


Fig.1 葛藤場面 1

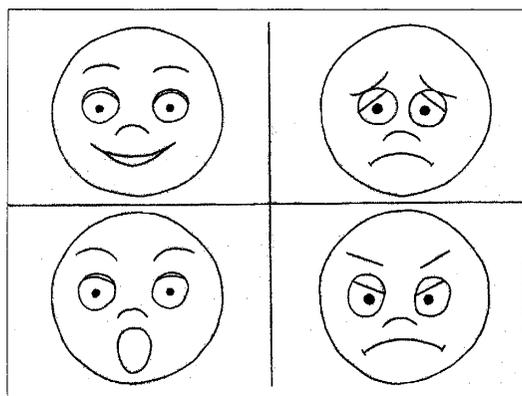


Fig.2 表情カード

均所用時間は約10分ほどであった。

2) 刺激図の作成

本研究での葛藤を「基本的に目標に接近しようとする傾向と目標を回避しようとする傾向の組み合わせ」と定義し、特に接近一回避の葛藤に注目する。幼児教育を専門とする教員とコミュニケーションを専攻している大学院生2名と筆者の4名で協議し、幼児期の子どもが体験しやすい接近一回避の葛藤場面を設定した。この際、家庭の状況や園での様子を含まない日常生活場面を設定した。また、幼児の耐性を考え、場面設定を4場面とした。

①場面1：買ってもらったアイスクリームを落としてしまった (Fig.1参照)。

②場面2：「どっちか好きな方をあげる」といわれたがどちらも好きで選べないでいるところ、「早く選ばないとあげない」といわれた。(以下、Fig.1と同様に、性別と表情が分化できないように工夫し、葛藤場面を作成した。)

③場面3：泣いている小さい子に自分の使っていたお

もちゃを貸そうとした時に、大人から「貸してやりなさい」といわれた。

④場面4：「欲しいと言っていたおもちゃを買ってきてあげたよ」といわれ、もらった物が欲しい物と色が違った。

3) 表情カードの作成

渡辺ら(1986)は表情識別能力について、3歳ころから正確に回答できると述べている。このことから、どのような感情が生じたのかを問う際に表情カードを用いた。渡辺らの「顔の表情カード」を参考に「嬉しい」「悲しい」「怒り」「驚き」の4種類の基本感情を表す表情を一枚の画用紙に作成した (Fig.2参照)。

結 果

1. 樹木画テストの結果

1) 対象児 A テスト施行中の様子：キョロキョロと落ち着かず、検査者の様子を窺いながら絵を描いた。用紙に描き出すまでに時間がかかったが、描き始めるとスムーズに仕上げる事ができた。形式的な特徴として  
1. サイズと位置 用紙の中央下の比較的小さい木 2. 枝の様子 接木スタイル 3. 幹の様子 地面と樹冠(枝)に連続性がなく閉鎖している 4. 全体的な印象 全体的に寂しい印象の木で、適当さや乱雑さが見られる 5. その他の特徴 落ち葉が地面に敷き詰められている。このことについて本児は、小さな木を並べて描きたかったが、途中で疲れたため落ち葉にしたと説明した (Fig.3参照)。

2) 対象児 B テスト施行中の様子：几帳面での対象児と比べるとかなりの時間を要した。腕で用紙を隠しながら描いている様子から自信がないような印象を受け

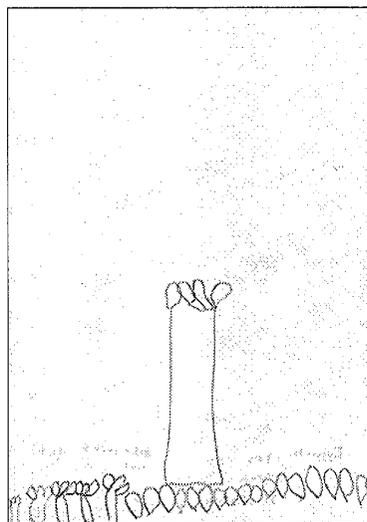


Fig.3 対象児 A の樹木画

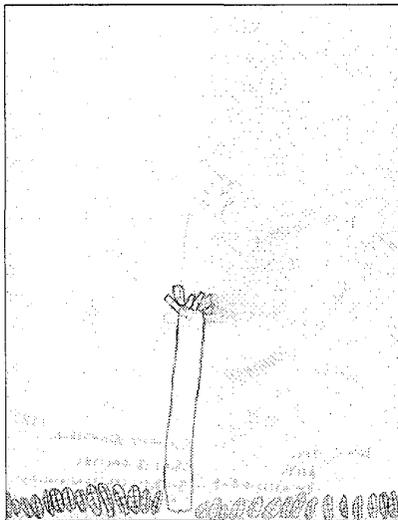


Fig.4 対象児 B の樹木画

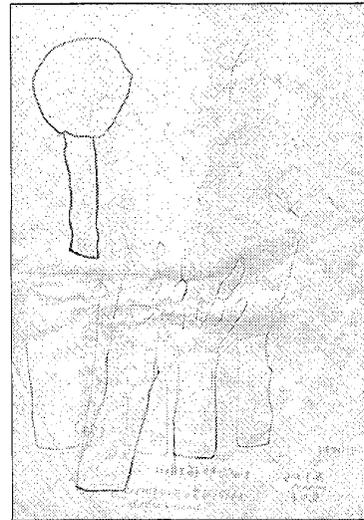


Fig.6 対象児 D の樹木画

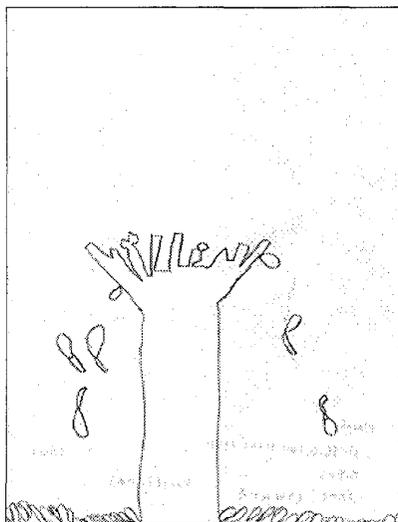


Fig.5 対象児 C の樹木画

た。

細かい部分まで詳細に描こうと、とても集中して取り組んだ。形式的な特徴として 1. サイズと位置 用紙の中央下の小さい木 2. 枝の様子 接木スタイル 3. 幹の様子 地面と樹冠(枝)に連続性がなく閉鎖している 4. 全体的な印象 全体的には寂しい感じがあり、萎縮している印象を受ける。しかし、葉の一つ一つに葉脈を描き込み、枝を何度も描き直すなど工夫・努力が見られる 5. その他の特徴 木の両側に落ち葉を敷き詰めている。落ち葉を数えながら描いていたが、このことについて木の両側の数をそろえなかったが、入りきれなかったとのことで数が半端になっていると説明した(Fig.4参照)。

3) 対象児 C テスト施行時の様子：テストを依頼すると快く受け入れ、鼻歌を歌うなど楽しそうに取り組んだ。形式的な特徴として 1. サイズと位置 用紙に対して普通サイズで用紙の中央下に位置する木 2. 枝の様子 上に向く枝 3. 幹の様子 下部が用紙内に描き込まれておらず下部が切断された状態 4. 全体的な印象 葉が散って行く様子から寂しい感じもするが、落ち葉に動きが見られ、季節感が出ており環境に適応できているように感じる。枝の様子から、上から押さえつけられている印象も受ける(Fig.5参照)。

4) 対象児 D テスト施行時の様子：首を傾げながら、描いては消しを繰り返しなかなか描き込めない。初めは、写実的な木の絵を描こうとし、時間をかけるがうまくいかず(本人は「間違ったから」と説明)5回描きなおし、6回目で完成させた。最後まであきらめずに納得できるまで描くことができた。形式的な特徴として 1. サイズと位置 用紙に対して小さく、左上の木 2. 幹の様子 上下ともに閉鎖した幹 3. 枝の様子 枝はなく円形の樹冠である 4. 全体的な印象 何度も描き直した跡から、優柔不動さや自信がない様子が顕著に現れている。結果的には子どもによく見られる一般的な絵(マッチ棒のような木)に留まった(Fig.6参照)。

5) 対象児 E テスト施行中の様子：用紙を渡すと、首を傾げ戸惑った様子。舌を出したり指をくわえたりと甘えた様子も見られたが、描き出すと一筆書きのように、迷いなく仕上げた。形式的な特徴として 1. サイズと位置 中央の大きな木 2. 幹の様子 下が広がっており、地面や根の描き込みがないため開放している状態 3. 全体的な印象 樹木の大きさなどから自信に満ちた感じがする一方、地面のない浮いた木になっており不安定さが感

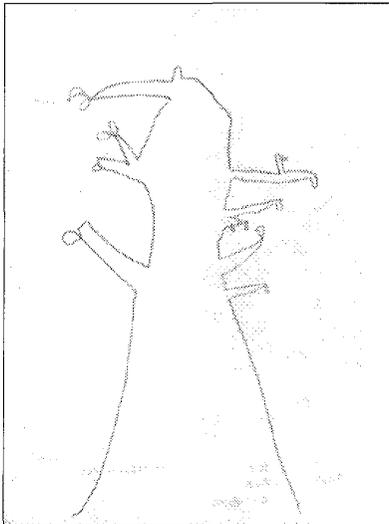


Fig.7 対象児 E の樹木画

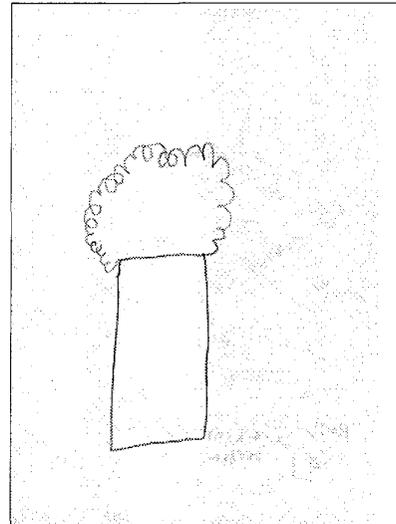


Fig.8 対象児 F の樹木画

じられ、葉がほとんどなく、空白の多い樹木画から寂しさも感じられる。4.その他の特徴 筆圧はやや強めで緊張がうかがえる。左に大きく曲がった木である (Fig.7 参照)。

6) 対象児 F テスト施行時の様子：テストに対する疑問や迷いは全く見せずに、勢い良く描いた。形式的な特徴として 1.サイズと位置 用紙に対して普通サイズの木で中央からやや左よりに位置する 2.幹の様子 上下ともに閉鎖しており、樹冠のわりに太い幹 3.樹冠の様子 雲形の樹冠 4.全体的な印象 用紙の中央にどんと構えた樹木や迷うことなく描き上げた様子から、自信が伝わってくる。樹冠の描き方がイラストチックである (Fig.8 参照)。

## 2. 葛藤場面における感情選択の実験結果

葛藤場面における感情選択の結果は Table 1 にまとめた通りである。

場面 1 では 5 名が「悲しい」と答え、1 名「驚いた」と答えたが、いずれも怒りの感情はない。場面 2・場面 3 では、それぞれ 1 名が「怒り」を選択し、5 名は「悲

しい」と答えた。場面 4 では、2 名が「怒り」を選択。4 名は「悲しい」と答えた。

対象児 A 場面 2, 3 で怒りを示した。また、場面 1 においても怒り感情をまず考えたが、最終的には「嫌な気分になる」ということで「悲しい」という結果になっている。

対象児 B 場面 4 で怒りを示した。場面 1 では「驚いた」と答えたが、他の場面では「悲しい」と答えた。

対象児 C 場面 4 において怒りを示した。他の場面では、嫌な気持ちになるため「悲しい」と答えた。

対象児 D 全ての場面において「悲しい」を選択。

対象児 E 全ての場面において「悲しい」を選択。

対象児 F 全ての場面において「悲しい」を選択。

## 考 察

### 1. 葛藤場面における感情選択について

場面 1 について、怒りを他者に向けることができない状況でどのように対処するのを見るもので、自己に向く怒りの感情が生じることを想定していた。しかし、怒

Table 1  
葛藤場面における感情選択

|        | 対象児 A | 対象児 B | 対象児 C | 対象児 D | 対象児 E | 対象児 F |
|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 葛藤場面 1 | 悲     | 驚     | 悲     | 悲     | 悲     | 悲     |
| 葛藤場面 2 | 怒     | 悲     | 悲     | 悲     | 悲     | 悲     |
| 葛藤場面 3 | 怒     | 悲     | 悲     | 悲     | 悲     | 悲     |
| 葛藤場面 4 | 悲     | 怒     | 怒     | 悲     | 悲     | 悲     |

りを表出する対象児はおらず、悲しい・驚きの表情が選択された。このことから、本研究で設定した場面1について、出来事に対して対象児らが反応したものと考えられる。その出来事の原因が自分にあることにまで洞察は及ばず、一度手にしたものが突然なくなった（場面1ではアイスクリームが食べられなくなった）ことに対する感情がまず生じたと考えられる。

場面2について、二つの好物を目の前に、一つを選ぶように言われ決めきれないでいるのに、急かされ、そしてあげないと言われる場面を設定した。この場面では、自分の思考・選択を阻害されることで他者（阻害している相手）に怒りが向くと想定していた。怒りを選択した対象児については、既述のように思考・選択を阻害されたことに対して怒りを表出したと考えられる。しかし、「悲しい」を表出した対象児について、場面1と同様、自分のものにするのが許されたものが突然なくなるといった出来事に対して、または相手の態度の変化という出来事に対して反応したものと考えられる。

場面3について、自発的に生じた思いやりの感情からとろうとした行動に対して、大人が一方向的に差別的に関わる場面を設定した。自発的に生じた感情を評価されなかったことに対する怒りを想定していた。怒りを選択した対象児については既述したことが考えられ、また、意思・行動を阻害されたことによる怒りも考えられる。その他の「悲しい」を選択した対象児については、自発性を評価してもらえなかったことに怒るのではなく、傷つき体験として場面を理解した可能性が考えられる。分かってもらえなかったことに対する悲しみの感情が、意思・行動を阻害される怒りよりも強かったと考えられる。

場面4について、自分のために相手がしてくれたことが自分の希望と違った場面を設定した。この場面では、希望を叶えてくれなかった相手に対して怒り（悔しさが含まれる）を表出すると想定した。しかし、この場面ではこころの理論に触れる内容でもあり、社会性の発達において最もデリケートな問題であることから、対象児を評価しないことに細心の注意を払いたい。怒りを選択した対象児については既述したことが考えられる。その他の「悲しい」を選択した対象児については、実際に希望が叶わなかったことに対する悲しみだけではなく、相手の気持ちを考慮して、自分の望みをあきらめる（がまんする）ことの表れとして「悲しい」を選択したと考えられる。

## 2. 葛藤場面における感情選択と樹木画との関係

本研究では、葛藤場面において怒りを選択した子どもの樹木画から、攻撃性や外向的な特徴は見られなかった。このことは、子どもの樹木画に攻撃的な特徴が見られるために、その子どもが攻撃的な性格ではないことも示唆し

Table 2  
怒りのタイプ

|      |                           |
|------|---------------------------|
| タイプ1 | 依存欲求が強く、精神的エネルギーを抑制している状態 |
| タイプ2 | 精神的に安定しており、自己統制ができる段階の状態  |

ている。子どもの絵を評価・解釈する際には、描画の全体的な印象・解釈と日常生活の観察が必要であることが確認された。

以上を踏まえた上で、本研究の樹木画の解釈から怒り感情には、精神的エネルギーを抑制しているタイプと、精神的に安定しているタイプの2つがあることが見出された（Table 2を参照）。

対象児A・Bがタイプ1にあてはまり、他の4人の対象児の樹木画と比較しても、顕著な違いが見られる。両者に共通して見られた樹木画の特徴（枝・幹の特徴）を解釈すると、自分の内に潜むエネルギーをうまく処理できていないのか、社会に適応した手段によって発散する方法を知らない可能性が考えられる。

対象児Cがタイプ1にあてはまる。樹木画の解釈から、（枝・幹の特徴から）自尊心が芽生え、自分の可能性を最大に試そうとしているのと同時に、（葉の様子から）自分はまだ依存していかなければならない存在であると気付いているという状況であると考えられる。対象児Cの絵もまた、他の対象児の絵と比較して、顕著な違いが見られた。

以下、それぞれのタイプを示した対象児A・B・Cについて、葛藤場面における怒り感情の選択と樹木画の関連を考察する。

タイプ1の対象児Aは、葛藤場面2・3で怒りを選択した。この2場面では、言語による直接的な圧力が加えられている場面である。この場面で怒りを表出することは、外部からの攻撃と思われる関わりから自分を守ろうと反応していることが考えられる。この反応は必要な力であると思われるが、周囲の環境から十分に守られていると感じることができていれば、自分で自分を守る必要はなくなる。樹木画の解釈に依存欲求が示唆されており、本児が依存対象を必要としていることが窺える。相手に攻撃の意図がなくても、主観的に本児が攻撃と感じれば怒りを表出する可能性は高いのではないだろうか。このことが、エネルギーをうまく処理できないと樹木画で示唆されていると思われる。これらのことから、受容的に本児と関わり、状況に適した感情の言語化を援助することが求められると考えられる。

タイプ1の対象児Bは、葛藤場面4で怒りを選択した。この場面では自分の願いを叶えてくれなかった相手に対して生じている。本児の樹木画から依存欲求が示唆されていることから、他者との一体感に対する期待が高い可能性が考えられる。そのため、自分の考えや願いを理解してくれているという思いと、思い通りならなかった現実とのズレが受け入れきれなかったのではないだろうか。このことから、欲しい物が手に入らなかったことに対する怒りよりも、自分の願いをわかっていなかった相手に対する怒りの方が強いのではないだろうか。この場面では、相手の気持ちを考慮して、自分はやまることが社会的に期待される反応である。このことを考慮に入れ、本児と受容的に関わり、うまく処理しきれない本児の気持ちを言語化するとともに、他者の気持ちも言語化することが発達の一助となると考えられる。

タイプ2の対象児Cは、葛藤場面4で怒りを選択している。樹木画の解釈から、本児は依存と自律に対応できていると思われる。そのため、葛藤場面2・3のような、言語による直接的な圧力に対して、自分がまだ依存的存在であることを感じている場面なのではないだろうか。対象児Aのように、攻撃とは感じずに指導やしつけといったものに感じたのではないだろうか。一方、葛藤場面4で怒りを選択した。この場面は相手から圧力を加えられていない状態で、自分の可能性を試そうとしているのか、自分自身を存分に表現しているのではないだろうか。このことは、自分の意見や考えに自信が持てる環境にいると推察される。自由な表現の一つとして怒りを表出することができているのではないだろうか。しかし、大人から言われたことは受け入れることができるが、自分の思い通りにならない場面では怒りを表出することは、周囲からは「わがまま」に映る可能性が考えられる。圧力が加えられていない場面だけで怒りを表出するのではなく、圧力が加えられている場面でも意見を言えるようになることで、「わがまま」に見られる表出は減少するのではないだろうか。

「怒り」の表出は、精神的に未熟な状態や感情をコントロールできない状態など様々な見方がされている。確かにそのような側面もあると思われるが、どのような「怒り」についても言えることではないことが本研究より明らかになったと思われる。子どもが怒りを表出する背景を理解し、否定的な感情としてだけでなく、怒りを感じて当然であることを大人との関わりを通して体験できることで、よりよい感情発達ができるのではないだろうか。

最後に、以上に挙げた樹木画の解釈の注意点として、対象児らは成長過程であり個人差が非常に大きな段階であることから、樹木画の解釈をそのまま当てはめることは相応しくないことに触れておく。このため、樹木画の

みから対象児らを評価することは避け、本研究における対象児らの理解が、今後変化していくことを念頭に考察した。

## 今後の課題

本研究では「怒り」感情に着目したが、怒りを示した子どもの人数が想定よりも少なかった。このことから、設定した葛藤場面が怒りを喚起する場面ではなかったことが考えられる。しかし同時に、怒らない・怒れない子どもの存在も示唆された。当然怒っても良いような場面で「悲しい」を選択した子どもは、場面の認知が悲観的であるのか、または葛藤場面で被害的に感じてしまうのか。どのような感情状態にあるのだろうか。これらのことから、怒りの場面設定の妥当性を検討することと、怒りを示さない子どもについての考察が今後の課題として残る。

## 謝辞

本論文作成にあたり、ご指導をいただきました九州大学大学院人間環境学研究院助教授福留留美先生に感謝いたします。また、研究に協力していただきましたご家族の方々にも深くお礼を申し上げます。ありがとうございました。

## 参考文献

- Di Leo, J.H. (著) 白川佳代子・石川元 (訳) 1999 絵にみる子どもの発達 分析と統合 誠信書房
- Di Leo, J.H. (著) 白川佳代子・石川元 (訳) 2002 子どもの絵を読む 潜伏期の子どもの121枚の絵 誠信書房
- 鹿島なつめ 2000 幼児の不安認知と対処能力についての発達の变化 九州大学心理学研究.
- Osborne, E. (著) 依田明・山上千鶴子 (訳) 1982 タビストック子どもの発達と心理 4歳 あすなろ書房
- Osborne, E. (著) 依田明・山上千鶴子 (訳) 1983 タビストック子どもの発達と心理 5歳 あすなろ書房
- Peterson, L.W., & Hardin, M.E. (著) 津波古澄子・安宅勝弘 (訳) 2001 危機にある子どもを見つける 高橋雅春・高橋依子 1986 樹木画テスト
- Wallon, H. (著) 浜田寿美男 (訳編) 1983 身体・自我・社会 ミネルバ書房
- Wallon, Ph., Cambier A., & Engelhart D. (著) 加藤義信・日下正一 (訳) 1995 子どもの絵の心理学

- 名古屋大学出版会  
渡辺弥生・瀧口ちひろ 1986 幼児の共感と母親の共感  
との関係 教育心理学研究
- Winnicott, D.W. (著) 橋本雅雄 (監訳) 1987 子ども  
の治療相談 岩崎学術出版社
- 横山正幸 1989 第9章 感情と意志の発達 山内光哉  
(編) 発達心理学 上 ナカニシヤ出版